

「スポーツを見る」について考える

「見る側の視点」が日本のスポーツの将来を決定する

笹川スポーツ財団 第6回スポーツアカデミー
2014年3月12日

町田 光

- 1956年 群馬県生まれ 早稲田大学文学部文芸学科卒業**
- 1981年 就職情報会社に就職。営業、編集、企画など経験**
- 1993年 バブル崩壊後の企業によくあった、「新規事業開発担当部長」に任命**
- 1995年 「アメリカ人が日本にアメフトを普及をしたがっている」という情報を入手、アメフトはやったことも見たこともないが、企画コンペに参加することに。**
- 1996年 NFLと代理業務契約締結、「NFL JAPAN LINK」設立、代表者となる。**
- 2001年 NFLの日本法人、NFLJAPAN設立。代表取締役社長となる。全日本日本フ
ラグフットボール協会設立**
- 2013年 NFLの日本戦略再編に伴い、NFLJAPANを閉鎖、新たなスタッフによる
「NFLJAPAN Liaison office」開設、シニアアドバイザーとなる**
- 現在 公益財団法人「日本ラグフットボール協会」専務理事
立命館大学 客員教授 早稲田大学 非常勤講師 他、考え中**

「うるさいロックと暗い映画と読書と散歩」の人生です

「スポーツ立国戦略」における、「見るスポーツ」を読んでみる

スポーツ立国戦略・はじめに

- スポーツは、世界の人々に大きな感動や楽しみ、活力をもたらすものであり、言語や生活習慣の違いを超え、人類が共同して発展させてきた世界共通の文化の一つである。
- また、スポーツは、人格の形成、体力の向上、健康長寿の礎であるとともに、地域の活性化や、スポーツ産業の広がりによる経済的効果など、明るく豊かで活力に満ちた社会を形成する上で欠かすことのできない存在である。
- 文部科学省では、現在の「スポーツ振興法」を見直し、新たにこれに代わる「スポーツ基本法」の検討を視野に入れ、今後の我が国のスポーツ政策の基本的な方向性を示す「スポーツ立国戦略」の策定に向けた検討を進めてきた。
- 検討に当たっては、スポーツが国民の一人一人の生活に密接なものであることを踏まえ、現場で活躍するアスリート、指導者、有識者をはじめ、スポーツ団体や企業、地方公共団体におけるスポーツ行政担当者や地域スポーツクラブ関係者など、幅広くスポーツに携わる方々との意見交換を重ねながら、現代のスポーツを巡る様々な課題を点検してきた。
- こうした検討の経緯を踏まえ、本戦略は、我が国の「新たなスポーツ文化の確立」を目指し、
○人(する人、観る人、支える(育てる)人)の重視
○連携・協働の推進
を「基本的な考え方」として、それらに導かれる今後概ね10年間で実施すべき5つの重点戦略、政策目標、重点的に実施すべき施策や体制整備の在り方などをパッケージとして示した広範囲をカバーするものとなっている。
- 文部科学省は、本戦略に掲げる施策を総合的かつ積極的に推進し、我が国の一層のスポーツ振興に取り組むことにより、スポーツ立国の実現を目指す。
- 本戦略の策定を機に、より多くの人々がスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、そしてスポーツを育てることを通じて、スポーツの持つ多様な意義や価値が社会全体に広く共有され、我が国の「新たなスポーツ文化」が確立されることを切に期待する。

スポーツ立国戦略の目指す姿

新たなスポーツ文化の確立

- スポーツは、私たちの「こころ」と「からだ」の健全な発達を促し、人生をより充実したものとするとともに、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成に寄与する世界共通の人類の文化の一つである。
- スポーツはその活動自体、体を動かすという人間の本源的な欲求にこたえ、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、喜びをもたらすという内在的な価値を有する。このため、生涯にわたり主体的にスポーツに親しむことのできる地域社会をつくることは幅広い世代の人々にとって大きな意義のあるものである。
- また、スポーツは社会的に次のような多様な意義を有しており、少子高齢社会を迎え、様々な課題に対峙しなければならない我が国にとって、スポーツの振興は、従前にも増して国や地方公共団体、スポーツ団体の重要な責務となっている。
 - ・ コミュニケーション能力やリーダーシップの育成、克己心やフェアプレイ、チームワークの精神の涵養、自然体験活動を通じた豊かな人間性の育成等により、青少年の心身の健全な発達に資する。
 - ・ スポーツを通じた交流は、地域の一体感や活力を醸成し、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生につながる。
 - ・ スポーツ振興によるスポーツ産業の広がりや、新たな需要と雇用を生み、我が国の経済成長に資するとともに、スポーツによる国民の心身の健康の保持増進は、医療・介護費抑制等の経済的効果を生む。
 - ・ スポーツの国際交流は、言語や生活習慣の違いを超え、同一のルールの下で互いに競い合うことなどにより、世界の人々との相互の理解を促進し、国際的な友好と親善に資する。
 - ・ 国際競技大会などにおける日本人選手の活躍は、我々に日本人としての誇りと喜び、夢と感動を与え、国民の意識を高揚させ、社会全体の活力となるとともに、国際社会における我が国の存在感を高める。
- これまでもスポーツの意義や価値は、スポーツ関係者はもとより、多くの人々から指摘されてきており、政府としてもスポーツ振興のための取組を進めてきたところであるが、本戦略においては、さらに、今後概ね10年間を見据え、「新しい公共」の理念の下、各々の興味・関心、適性等に応じて現状よりさらに多くの人々が様々な形態(する、観る、支える(育てる))でスポーツに積極的に参画できる環境を実現することを目指している。
- そのため、本戦略では、トップスポーツと地域スポーツを一体的に捉え、トップスポーツと地域スポーツが互いに支え合う「好循環」を生み出すことなどを掲げている。トップスポーツで培ったアスリートの技術・経験や人間的な魅力、スポーツ医・科学の研究成果等を地域スポーツに還元し、スポーツのすそ野を広げるとともに、その中で新たに発掘された才能をスポーツ医・科学研究を活かして体系的に育成・強化することにより、地域からの新たなトップアスリートの輩出も期待できる。
- 本戦略は、このような取組を通じて、スポーツの意義や価値が広く国民に共有され、より多くの人々がスポーツの楽しさや感動を分かち、互いに支え合う「新たなスポーツ文化」を確立することを目指すものである。

基本的な考え方

本戦略では、「スポーツ立国戦略の目指す姿」を実現するため、

1. 人(する人、観る人、支える(育てる)人)の重視
2. 連携・協働の推進

の基本的な考え方のもと、実施すべき5つの重点戦略として、

- (1) ライフステージに応じたスポーツ機会の創造
- (2) 世界で競い合うトップアスリートの育成・強化
- (3) スポーツ界の連携・協働による「好循環」の創出
- (4) スポーツ界における透明性や公平・公正性の向上
- (5) 社会全体でスポーツを支える基盤の整備

を掲げることとする。基本的な考え方は次の通りである。

1. 人(する人、観る人、支える(育てる)人)の重視

- スポーツを通じて幸福で豊かな生活を実現することは、すべての人々に保障されるべき権利の一つである。各人の自発性のもと、各々の興味・関心、適性等に応じて安全かつ公正な環境のもとで、日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参画する機会が確保されなければならない。
- こうした観点から、**スポーツを実際に「する人」だけではなく、トップレベルの競技大会やプロスポーツの観戦など、スポーツを「観る人」、そして指導者やスポーツボランティアといったスポーツを「支える(育てる)人」に着目し**、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環具体的には、地域における人々のスポーツ機会の確保・充実を図るとともに、豊かなスポーツライフを実現する基礎となる学校体育・運動部活動の充実に取り組む。また、世界で活躍するトップアスリートが安心して競技に専念できる環境の整備や、トップアスリート・指導者・審判員等に対し、必要なサポートを提供する。さらに、国際競技大会の招致・開催を積極的に支援する。
- 我が国のスポーツの普及及び競技水準の向上において重要な役割を担うスポーツ団体の運営は、スポーツを行うアスリートや指導者等の個人にとって大きな影響がある。また、スポーツ界には、国費はもとより、スポーツ振興基金・スポーツ振興くじ助成など多額の公的な資金が投入されている。スポーツ界にはこれら財源をアスリート等の育成・強化やスポーツの普及のために効果的・効率的に活用する責任と、公的な資金を受給するのにふさわしい団体のガバナンスが求められる。
- このため、国はスポーツ団体等と連携・協力し、団体のガバナンス強化、紛争解決システムの整備、ドーピング防止活動等を通じて、透明性の高い公平・公正なスポーツ界を実現する。
- 境をハード(施設等)、ソフト(プログラム・指導者等)の両面から整備する。

2. 連携・協働の推進

- スポーツを普及・定着させ、スポーツを人々にとって身近なものとするためには、地域スポーツクラブ、学校、地方公共団体、スポーツ団体、企業などが組織の違いを超えて連携することにより、トップスポーツと地域スポーツの垣根をなくし、人材の好循環を生み出すことが必要である。
- すなわち、トップアスリートが有する優れた技や人間的な魅力とスポーツを通じて培ったコミュニケーション能力やマネジメント能力を積極的に地域に還元することにより、青少年を含む人々のスポーツへの参加意欲を高め、地域から新たな才能が発掘されることが期待できる。このような人材の好循環を形成することにより、スポーツのすそ野が拡大し、トップの伸長にも寄与するであろう。
- このための具体的な方策として、拠点となる総合型地域スポーツクラブ(「拠点クラブ」)に引退後のトップアスリートを配置し、地域住民に質の高いスポーツサービスを提供したり、学校体育の外部指導者として派遣したりすることなどを積極的に進める。また、競技により培ったトップアスリートの技能が社会に還元されるよう、キャリア形成のための奨学金の給付、企業や総合型地域スポーツクラブ(総合型クラブ)等への紹介・斡旋などを一体的に行う新たなシステムの構築を検討する。
- また、我が国のスポーツ界全体の向上という観点からは、優れた技術・能力・施設を有する組織には、自らの組織にのみ目を向けるのではなく、それらを他者に開放し、互いに共有・活用しあう姿勢が求められる。このため、地域スポーツクラブ、学校、地方公共団体、スポーツ団体、企業などスポーツ界の横断的な連携を強化し、スポーツ界が一丸となってスポーツ振興に取り組む体制を構築することが必要である。
- さらに、スポーツは世界共通の人類の文化の一つであり、現在、国際競技大会をはじめとする世界的な規模でのスポーツ交流が活発に行われている。このような交流を通じて、多くの日本人が積極的に諸外国の人々と広く国際的に連携・協働することは、我が国に対する理解を深め、友好的な関係を構築するとともに、スポーツ界における我が国の存在感を高めることにもつながる。
- 一方、スポーツは、地域住民の結びつきを強め、地域の一体感を生み、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)の形成に大きく貢献するものである。現在、推進している総合型クラブ等を通じて、互いに顔の見える家族や社会とのつながりの中で住民同士が連携・協働することにより、スポーツを主体的に楽しむことができる地域スポーツ環境の整備を進める。
- その際、これまでの行政による無償の公共サービスから脱却し、地域住民が出し合う会費や寄附により自主的に運営するNPOのコミュニティスポーツクラブが主体となった「新しい公共」を形成することを進める。
- また、このようなスポーツを基盤とする「新しい公共」の形成への参画を促すためには、人々が広くスポーツの持つ意義や価値共有することが必要である。このため、公的な資金に支えられて活動しているトップアスリート・指導者が、自らの活動内容や成果を直接人々に訴えかける機会を設けるなど、スポーツ界自身が積極的に社会貢献や説明責任を果たす取組を進める。また、人々のスポーツへの興味・関心を高めるための国民運動の積極的な展開や広くスポーツに対する寄附を促す税制措置の検討等を行う。

1. ライフステージに応じたスポーツ機会の創造

【目標】

○国民の誰もが、それぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会を実現する。

○その目標として、できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が3人に2人(65パーセント程度)、成人の週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人(30パーセント程度)となることを目指す。

○豊かなスポーツライフを実現する基礎となる学校体育・運動部活動の充実を図る。

(1) 総合型地域スポーツクラブを中心とした地域スポーツ環境の整備

- 1) トップアスリート等を活用した魅力あるスポーツサービスの提供
- 2) 「新しい公共」を担うコミュニティスポーツクラブの推進
- 3) 地域スポーツを担う人材の養成・活用の充実
- 4) 身近なスポーツ活動の場の確保
- 5) 学校体育施設の有効活用の推進
- 6) グラウンドの芝生化の推進
- 7) 安心してスポーツ活動を行うための環境整備

(2) ライフステージに応じたスポーツ活動の推進

- 1) 幼児期・学童期の運動・スポーツ指針の策定
- 2) 子どもの体力向上に向けたスポーツ機会の充実等の取組の推進
- 3) 若者をはじめとした成人のスポーツ参加機会の拡充
- 4) 高齢者の体力づくり支援

(3) 学校における体育・運動部活動の充実

- 1) 「小学校体育活動コーディネーター(仮称)」の配置
- 2) 体育授業・運動部活動における外部指導者の充実
- 3) 新学習指導要領の円滑な実施による体育授業の充実
- 4) 体育・保健体育のデジタル教材の作成・配布
- 5) 中学生・高校生のスポーツ機会の充実

2. 世界で競い合うトップアスリートの育成・強化

【目標】

○世界の強豪国に伍する競技力向上を図るため、ジュニア期からトップレベルに至る体系的な強化体制を構築する。

○今後の夏季・冬季オリンピック競技大会について、それぞれ過去最多(夏季37(アテネ)、冬季10(長野))を超えるメダル数の獲得を目指す。また、オリンピック競技大会及び各世界選手権大会において、過去最多(オリンピック競技大会では、夏季52(北京)、冬季25(ソルトレークシティー))を超える入賞者数を目指す。さらに、将来を見据えた中・長期的な強化・育成戦略を推進する観点から、各ジュニア選手権大会のメダル獲得数の大幅増を目指す。

○トップアスリートがジュニア期から引退後まで安心して競技に専念することができる環境を整備する。

○国際競技大会等を積極的に招致・開催し、競技力向上を含めたスポーツの振興、地域の活性化等を図る。

(1) トップアスリート・指導者等の多様な活躍の支援

- 1) ジュニア期からトップレベルに至る戦略的支援の強化
- 2) トップアスリート・指導者・審判員等の海外研さん支援の充実

(2) トップアスリートのための強化・研究活動等の拠点構築

- 1) 大学を活用した分散型強化・研究活動拠点ネットワークの構築
- 2) 国立スポーツ科学センター(JISS)の機能強化
- 3) ナショナルトレーニングセンターの在り方の検討

(3) トップアスリートが安心して競技に専念できる環境の整備

- 1) ジュニア期から引退後までのキャリア形成支援と社会貢献の推進
- 2) 女性アスリートが活躍しやすい環境の整備
- 3) 強化活動に貢献した企業への表彰等の実施
- 4) 障害者スポーツとの連携強化

(4) その他の国際競技力向上策

- 1) 国際競技大会の招致・開催支援、スポーツ・ツーリズムの促進
- 2) ドーピング検査体制・防止活動の充実

3. スポーツ界の連携・協働による「好循環」の創出

【目標】

○トップスポーツと地域スポーツの好循環を創出するため、広域市町村圏（全国300箇所程度）を目安として、拠点となる総合型クラブ（「拠点クラブ」）に引退後のトップアスリートなどの優れた指導者を配置する。

○学校と地域の連携を強化し、人材の好循環を図るため、学校体育・運動部活動で活用する地域のスポーツ人材の拡充を目指す。

(1) トップスポーツと地域スポーツの好循環の創出

- 1) トップアスリート等が地域スポーツの場で活躍できる体制の整備
- 2) 「小学校体育活動コーディネーター（仮称）」の配置
- 3) 体育授業・運動部活動における外部指導者の充実
- 4) ジュニア期からの戦略的支援の強化
- 5) ジュニア期から引退後までのキャリア形成支援と社会貢献の推進
- 6) スポーツキャリア形成支援のためのワンストップサービスの実現

(2) スポーツ界の連携・協働の促進

- 1) 大学を活用した分散型強化・研究活動拠点ネットワークの構築
- 2) 国立スポーツ科学センター（JISS）の機能強化
- 3) 学校体育施設の有効活用の推進
- 4) スポーツ団体の連携体制の構築
- 5) スポーツに関する国際交流・協力の推進

4. スポーツ界における透明性や公平・公正性の向上

【目標】

地域スポーツ活動の推進により「新しい公共」の形成を促すとともに、国民のスポーツへの興味・関心を高めるための国民運動の展開や税制措置等により、社会全体でスポーツを支えるための基盤を整備する。

- 1) 「新しい公共」を担うコミュニティスポーツクラブの推進
- 2) 地域スポーツ活動支援のための環境整備等
- 3) 「スポーツ・プロモーション・ムーブメント（仮称）」の展開
- 4) 「新しい公共」の形成を促進するための寄附税制等の税制措置の検討
- 5) スポーツ分野における顕彰制度等の拡充

5. 社会全体でスポーツを支える基盤の整備

【目標】

地域スポーツ活動の推進により「新しい公共」の形成を促すとともに、国民のスポーツへの興味・関心を高めるための国民運動の展開や税制措置等により、社会全体でスポーツを支えるための基盤を整備する。

- 1) 「新しい公共」を担うコミュニティスポーツクラブの推進
- 2) 地域スポーツ活動支援のための環境整備等
- 3) 「スポーツ・プロモーション・ムーブメント（仮称）」の展開
- 4) 「新しい公共」の形成を促進するための寄附税制等の税制措置の検討
- 5) スポーツ分野における顕彰制度等の拡充

日本政府が、この国のスポーツ政策の基本を記した文章において、
しかもその冒頭でスポーツの「する、見る、支える」の3点を「重視する」
と自ら明示したにもかかわらず、具体的戦略と取り組みを述べた本文において
「見るスポーツ」について「全く触れていない」、という事実

これはつまり

地域スポーツとトップスポーツが一体となって「競技力を向上し」

オリンピックや世界の競技大会で「メダルを取れば」

自然に「見る人」も（「支える人」も）どんどん増大して

日本中がスポーツで盛り上がり、

「スポーツ文化」が出来上がるという事なのだろうか？

「スポーツ(文化)」とはそんな単純なことなのか！

「スポーツを見る」という事についてちゃんと考えてみる

そのためにまず「スポーツをする」と「スポーツを見る」との関係性について考える

「スポーツをする」とは
「勝利」「順位」「記録」「完成」などの
スポーツの内部に存在する目的に向かう
「自己完結的行為」である。

そこには「外部」は存在せず、むしろ「他者」の意識もない。

しかもスポーツは言葉を用いない身体活動である。
そこでは「自己意識」すら消失しているのではないか

**「スポーツをする」とは、意味や関係性を必要としない
「純粹行為」である**

それに対して音楽や映画、文学などは「表現」と呼ばれる。
そこには「表現する主体・意識」が存在し、なんらかの価値観、世界観、美意識
等に基づく「メッセージ」がある。つまり「表現」にはその前提として
「意味」や「他者」そして「コミュニケーション」が存在する。

**スポーツが『純粹行為』であること、
ここに「スポーツを見る」ことの価値が生まれる。**

意味やメッセージを持つ「表現」はその対象やコミュニケーションを限定する。

しかし意味もメッセージも持たないスポーツはどちらも限定しない。

**しかしそこではスポーツを見る側が
自由に勝手に意味付けを行なっている。**

(たとえば受験に失敗して落ち込んでいる人は「あの選手のプレーを見たらこんな些細な事にいつまでも拘る自分が恥ずかしい。選手が叱ってくれて立ち直れた」などの様に。)

このように「スポーツ」とは
**「人々の幻想を受け止める包容力の高い装置」
なのである。**

また同時代、同じ地域社会を生活している人々は共通する生活感覚や社会意識を持っている。これらを広く受け止める（自分の心を投影する）ことができるのも、何の意味も価値付けも行っていない無色透明の「スポーツ」だから可能である。

つまり「（見る）スポーツ」とは、個々人の様々な思いを、そしてまた多くの人々に共通する社会意識を投影し（受け止め）、映し出す「共同幻想」の装置である、という点に価値があるのではないだろうか。

（震災後、なでしこジャパンの活躍を見て「日本はまだ大丈夫だ、必ず立ち直ることができる」と国民の多くが感じたように、また誰もが行きづまりを感じる現在のダメな日本だからこそ「ソチオリンピック」「真央ちゃん」「葛西選手」……に異常な熱狂を示したように）

このようにスポーツの「社会における存在価値」や、「公共性」といった事柄は「スポーツを見る」という事を抜きにしては成立しえないものではないか。

なぜなら自己完結的な性質を持つ「スポーツをする」こと自体は、それがチームスポーツであれ、その競技者数が大きなものであれ、本質的に「個人的行為」であるからである。

(もちろんそれは素晴らしい行為である)

「スポーツを見る」側がそこに「意味付け＝価値」を与えたときに、初めてスポーツは社会に開かれ、「社会に有用な存在」となり、「公共的なものある」と認識される。

**スポーツは「する＋みる」が一体となって
初めて社会的存在(公共性)となる**

(実は)音楽も映画も美術も同様である。また世の中のほとんどの存在も同様である。

この一例として「スポーツの地域密着」について考えてみる。

その本質は「人は皆アイデンティティを持っている」という点である。アイデンティティとは、「ある人が一個の人格として時間的・空間的に一貫して存在している認識を持ち、それが他者や共同体からも認められていること」(広辞苑)である。

人のアイデンティティとなる大きな要素が「(生まれたor育った)地域や、深く関わった場所や集団、組織」である。(私で言えば「日本」「群馬県」「東京」「早稲田大学」)

普段はそれらを意識することはないが、何かのきっかけでその「記号」に触れるとアイデンティティが刺激され「気持ち動き出し、自分を再認識し、何かうれしくなる」

その最大の刺激が「スポーツ」である。それは人のアイデンティティを刺激し、「自分自身のルーツ、心のよりどころを確認し」そのことを受け止めてくれる(気がする)。

(これが高校野球や高校サッカー、(種目を問わず)「日本代表」が人気の理由である)

人に自分自身の存在や、自己のルーツを思い起こさせ、気持ちを驚掴みし、そのことを受け止めてくれる(かのように見える)強力な存在は他に無い。

成熟社会を迎えた日本におけるスポーツの社会的重要性

(何が日本のスポーツに新たな、そして重要な意味、価値を与えるのか)

日本は経済的な豊かさを達成した後の「成熟社会」を迎えている。

豊かさは価値観の多様化を齎し、そのことが自由を担保する。

いまや、人々はそれぞれの価値観に基づき、自由なライフスタイルで生きる事ができるようになった。

しかし「価値観の多様化」とは「価値の相対化」でもある。その結果誰もが共有する「正しさ」「素晴らしさ」などの「大きな物語」が消滅する。

明確で強固な価値軸を失った社会は、複雑になり、流動化を増し、社会の在り様や自分の役割、存在価値が見えにくくなる。

つまり成熟社会とは、豊かさと自由と引き換えに、皆が孤独や不安に向き合わねばならない時代である。

更に「グローバル化」「高度情報化」「激しい競争」などが加わり日本は「自由だが冷たく、厳しい、高ストレス社会」になった。

(昔の日本＝不自由だが暖かく優しい社会)

孤独だ

ほんとは不安だらけ

**「自己責任」
という脅威**

私って何？何ができる？

「負け組」という恐怖

「アイデンティティクライシス」

**人々の深い
心理的欲求**

**「自分自身」の存在を
実感したい**

**自分が意味ある存在
だと感じたい**

仲間が欲しい

**皆との一体感が
欲しい**

**自分を高め、何かに
貢献したいと思う**

**思いっきり感動して
自分を解放したい**

「豊かで自由」であるがゆえの孤独や不安を抱えざるを得ない成熟社会において、多くの人々が開放感や安心感、自己承認感、人とのつながり、一体感など「生に対する肯定感」を得ることのできる「社会装置」が必要だ。

日本はこれまで近代化を進めながら、人々がバラバラにならない「スポーツを必要としない幸せな国」だった。しかし成熟社会を迎えたこれからの日本においてスポーツは「社会の根底にある大きな問題を解決する装置」として新たな価値を持つだろう。

ここに日本における「**スポーツの新たな可能性**」がある。
しかしそれは「(競技)をする事」だけではないばかりか
「(競技)を見る事」だけでもない。そんな小さな世界の話ではない。
「多くの人々が感情的・精神的な喜びや繋がりを感じられ、
そこに出会いやコミュニケーションの可能性を開く装置」と
しての「**新しいスポーツのあり方**」が求められている。

(既に多くの人々はスポーツをそのように「消費」している)

**それには「従来の日本のスポーツ」を対象化する作業が必要
であり、そこで重要なのが「見る側の視点」なのである。**

ところで「するスポーツ」はもっと 「公共的な存在」になり得ないのか？

もちろんできる

「高度化したスポーツ」を対象化、解体し、「スポーツ＝遊び」の原点に立ち返り、「身体を使う楽しいゲーム」としてだれにでも参加できる「スポーツソフト」に再構築し、広く社会に提供することである。

それを阻むものも「スポーツとは高度化をめざし、勝利することに価値がある」としか考えない多くの「競技者」と、元競技者が組織する「スポーツ組織」の偏狭、視野狭窄であり、更にそこに権力と権利、権限を与え続ける「スポーツ立国」に象徴される日本のスポーツ行政やアカデミズムである。

前向きな提言

スポーツ組織から行政、メディア、アカデミズムに至るまで

日本のすべてのスポーツ界の原理(?)のように見える

「競技者自治」の構造を変え

様々な領域から広く有能な人材を登用し

新たな才能、新たな思考、新たな行動で

「スポーツの価値」を再定義し、真の公共財にしよう

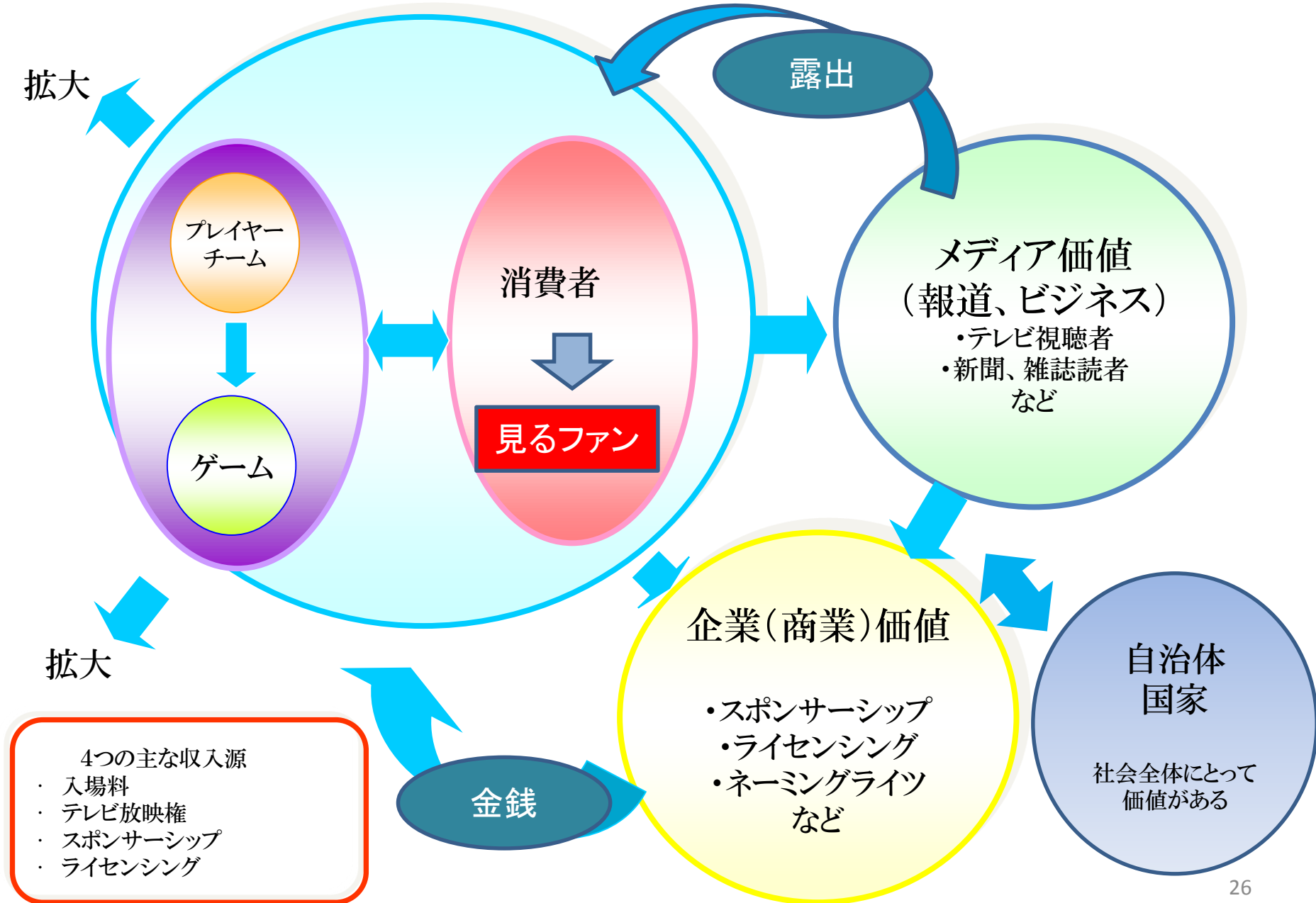
(「FOOTBALL PEOPLE」+「BUSINESS PEOPLE」)という構造

直視すべき、「スポーツのコインの裏」

- ・(スポーツのエキサイトメントとは)単純に言うと脱自の状態、他者との同化の中で生じているのである。スポーツにはどこか理性をマヒさせるファシズム熱狂の要素がなくはないのである(多木浩二)
- ・現代の日本の社会は、あたかもスポーツのトレーニングをするように自己を高めようとする個々人の欲望をひとつの大きな原動力としているような社会なのでしょう。(中略)そうした構造がはらまざるを得ない問題点が、スポーツ的自己実現の物語のもつ「美談性」とでもいえるものによって、解毒されているかのような幻想が生じてしまっているのです(福田裕大)
- ・「見るスポーツ」が持つ別の役立つ機能がまだ他にもあります。ひとつは、それらは「ショービニズム(好戦的盲目的愛国主義)」を築き上げる素晴らしい方法になることです。何か意味のない共同体に対する非理性的忠誠心というこの感覚は、権力への従属訓練のための訓練なのです。非理性的競争、権力機構に対する非理性的忠誠、極めて恐ろしい価値観への受動的黙認などが、実際に「見るスポーツ」によって、強調され、誇張され、引き出されます。(チョムスキー)

おわり

(参考) スポーツ経営の基本構造 町田 2008



(参考) 「スポーツを見る」は多様でありそれが「可能性」である

A little bit Interested

Somewhat Interested

Casual Fan

Avid Fan

- ・ルールは知らないがみんなが話題にしているスポーツや選手は気になる
- ・地上波でやってる日本代表戦はたまに見る
- ・パブリックビューイングで盛り上がるのはいい感じた。自分も参加して盛り上がりたい。ロックフェスで知り合った仲間も声をかけてみよう

- ・地上波でやっている日本代表戦は見る
- ・加入しているNHKBSやケーブルテレビでまたたま放送していると見てしまう
- ・友達の話題にも遅れたくないので有名選手には興味があり、websiteでチェックする

- ・地上波で放送があればまあ見る
- ・家がスカパーやケーブルテレビの基本パッケージに入っていればときどき見る
- ・年1回くらいはくらいはスタジアムに行くかも
- ・たまにwebsiteをチェックするようにしている

- ・年数回はリーグ戦をスタジアムで見る
- ・CS放送のシーズンパッケージを購入したい
- ・好きなチームのグッズを持っている
- ・そのスポーツ専門紙を良く買う
- ・週1回はwebsiteをチェックする

(参考)

Power of the NFL BRAND

– Key Consumer Insight

- In a world where people are doing more with less time, there is an increasing need to reconnect and belong

– The NFL is a powerful unifying force

- Family
- Friends
- Colleagues
- Communities



(参考)

NFL Brand Positioning

To be seen, thought of and experienced as “the” premiere sports and entertainment brand that brings people together, connecting them socially and emotionally like no other.

